

ゴッティエ・カプソン (2022.4.15) © 大窪道治

【 Report 】

# 開館25周年のスタートを 華やかに彩った2大プロジェクト

## TOPPANホール25周年 室内楽フェスティバル

縁ある名手と紡いだ、唯一無二の豊穡な祝祭 柴田克彦

## ハーゲン プロジェクト フィナーレ Part1

グランドフィナーレへの序章、万感の熱演 宮下 博

## 北村 陽 (チェロ)

“神童” から“真の音楽家” へ 飯尾洋一

【 Schedule 2026.1～6 】

【 Information 】

第17回 TOPPANチャリティーコンサート

ランチタイムコンサート Vol.138 特別企画

佐藤麻理 (ピアノ) &amp; 瀧村依里 (ヴァイオリン) &amp; 田原綾子 (ヴィオラ) &amp; 築地杏里 (チェロ)

ブラームス×JNO Chamber Colors / 善養寺恵介 尺八演奏会



# 開館25周年のスタートを華やかに彩った、2大プロ 興奮と熱狂が渦巻いた全記録をレポート！



TOPPANホール25周年 室内楽フェスティバル

ハーゲン プロジェクト

## 縁ある名手と紡いだ、唯一無二の豊穡な祝祭 柴田克彦

「TOPPANホール25周年 室内楽フェスティバル」は、まさしく「TOPPANホール以外では聴けない」豊穡な5公演だった。

核となったのはフォーレ四重奏団（以下フォーレQ）。30年間不動のメンバーで活動を続ける世界でも稀な常設のピアノ四重奏団である。緻密なアンサンブルと生気に富んだ表現を共生させた当グループは、近年TOPPANホールに数多く出演。ハーゲン・カルテットと並ぶホールの顔となっている。

今回はさらに日下紗矢子（ヴァイオリン）、ニルス・メンケマイヤー（ヴィオラ）、笹沼樹（チェロ）、石川滋（コントラバス）という当ホールにゆかりの深い名手たちや、アネッテ・ダッシュ（ソプラノ）も加わって、文字通りの「フェスティバル」が展開された。

しかも各公演は、ありがたいチクルス等ではなく、フォーレQの解体及び別奏者の参加によって新たなアンサンブルを生み出す興趣に富んだ内容。そこには既にフォーレQの公演で古今のピアノ四重奏曲の大半を網羅したホールの強みが反映されているし、ある意味一歩先を行く企画でもある。

初日の10月2日はフォーレQによるモーツァルトのピアノ四重奏曲第2番で開始。4人が溶け合いながら各楽章の特性が的確に浮き彫りにされる。お次はフォーレQの3人に日下とメンケマイヤーを加えたモーツァルトの弦楽五重奏曲短調K516。爽快にして濃厚な好演となったが、感心したのは第1ヴァイオリンの日下が絶妙なバランスで全体をリードした点。「フォーレQとは初共演」という日下だが、まるで長年共に演奏してきたかのような。むしろメンケマイヤーも然り。その要因はドイツを地盤とする語法の共通性であろう。後半はフォーレQに石川を加えたシューベルトのピアノ五重奏曲《鱒》。ここは意外にシリアスで剛直な表現がなされる。そしてアンコールのブラームスのピアノ四重奏曲第1番第4楽章の推進力と熱量がフォーレQの真髄を明示した。

2日目の10月4日はドイツ・ロマン派プロ。最初のメンデルスゾーンのピアノ四重奏曲第2番は、フォーレQが緊迫感と余裕を併せ持った佳演を聴かせる。2曲目はメンケマイヤーとフォーレQのピアニスト、ディルク・モメルツによるブラームスのヴィオラ・ソナタ第2番。メンケマイヤーは豊潤な音色で雄弁な演奏を繰り広げ、モメルツは精妙に共奏する。後半のシューマンのピアノ五重奏曲は日下が第2ヴァイオリンで加わって緊密なアンサンブルを成就。脈動感に満ちたこの快演は今回の白眉のひとつとなった。シューマンのピアノ四重奏曲第3楽章のアンコールのしみじみとした味わいも絶品。初日と子ども、ピアノ四重奏曲の有名楽章をフォーレQのみのアンコールで聴かせるのは、実に洒落ている。

3日目の10月5日はフォーレQとダッシュの共演。ブラームスのピアノ四重奏曲第3番の楽章の間にマーラーとワーグナーの歌曲が挟まれた創意あふれるプログラムだ。しかもこうしたフェスティバルに歌を加えるという発想に本企画の懐の深さが表れている。ここでダッシュは、声を張り上げることなく、ナチュラルかつ細やかな歌唱を披露。フォーレQが芳醇に奏でるブラームスと相まって、各音楽の有機的な繋がりが示されていく。

その中での頂点はワーグナーの《ヴェーゼンドンク歌曲集》。同曲の多彩な表情や官能美を初めて体験したとの思いひとしおだ。さらに面白かったのが、全体を通して今回はいないリヒャルト・シュトラウスの影が感じられたこと。シュトラウスの音楽の抛り所を実感できたのはひとつの収穫でもあった。

4日目の10月7日はウィーンゆかりの器楽曲。前半は、フォーレQの3人によるシューベルトの弦楽三重奏曲第1番に、メンケマイヤーとモメルツによる《アルペジオーネ・ソナタ》が続く。精緻で余情あふれる三重奏曲も、引き締まった《アルペジオーネ》も秀演だったが、今回最大の成果のひとつとなったのが、モーツァルトのK516の5人に笹沼を加えたシェーンベルクの《浄められた夜》。これは、濃密さや叙情性、感情の振幅がフルに表現された、説得力抜群の名演だった。そしてここもまた日下（第1ヴァイオリン）のリーダーシップと力量に感嘆させられた。

5日目の10月8日はフォーレQとダッシュによるドイツのオペレッタ及びアメリカのミュージカルのナンバー中心のプログラム。馴染みの薄い作品を多く含むこの内容は、日本人ならまず発案しないだろう。フォーレQとダッシュは度々共演し、本プロも欧州で披露しているとのことだが、こちらはレアなステージを興味深く堪能した感が強い。ダッシュは各曲の機微を鮮やかに歌い分け、フォーレQのみの演奏にもじっと耳を傾ける。声ではなく歌と所作で聴かせる…それは彼女の巧みさと矜持の表れであろう。本公演は歌と室内楽の「艶」が融合した見事な締めくくりとなった。

周到な企画力が唯一無二のフェスティバルを創造した5日間。ここにはTOPPANホール独自の魅力が集約されていた。

（しばた・かつひこ／音楽評論家）

## グランドフィナーレへの序章、

現代を代表する弦楽四重奏団のひとつ、ハーゲン・カルテットが幕引きにあたって、世界の音楽ファンへ別れを告げるのに選んだメインの会場は、ほかならぬTOPPANホールだった。

《ハーゲン プロジェクト フィナーレ》と銘打たれた11月11日～13日の3夜連続公演は、全5回のパート1という特別な時間。万感こもる入魂の熱演を一音たりとも聴き漏らすまいと、聴衆が固唾をのんで向きあい、開館25周年を迎えた同ホールの歴史に特筆すべき1ページを刻みこんだ。

ハーゲン・カルテットとTOPPANホールの縁は深い。初めて同ホールに登場した2003年以来、来演は計12回29公演におよぶという。西巻正史プログラミング・ディレクターとの深い信頼関係のおかげで、多くの実りある企画がもたらされた。

今回はそんな道程を振り返りつつ、演奏・解釈でもう一段の深化を最後に見せたのに驚いた。会場の特性を生かしたデリケートな弱音と落ち着いた響きを表現の軸に据えながら、日によってベクトルは変化した。内省的なアプローチで作品の苦みや悲しみをあぶり出した初日、肩の力が抜けた軽みと共に超弱音を意識的に駆使した2日目、現在と過去をめぐる振り子を想起させた3日目と、みごとな変わり身。演奏の集中度も高い。選曲をみると、作曲者の最晩年や苦境に生まれた作品が多い。有終の美を飾るため、本気で「さよなら」を言いに来たプログラムなのだ、と得心した。

初日（11日）の冒頭、J.S.バッハ《フーガの技法》の4曲では、静謐で柔らかな陰影が支配する。ほぼ切れ目なくショスタコーヴィチの弦楽四重奏曲第8番へ流れ込んだ。弱音が極度の緊張をはらみ、作曲家の自画像といわれる苦み走った曲想へ肉薄。沈潜する悲しみや重い涙を、抑制の利いたダークな音色で描出していく。第4楽章のヴァイオリン、ヴィオラ、チェロによるユニゾンには生身に突き刺さるような衝撃度を放ち、終楽章ラルゴの静まりかえった結びで客席は金縛りにあったようになった。後半のシューベルト最後の弦楽四重奏曲第15番も、慈しむようによく歌う演奏。寂寥感がひたひたと迫り、悲劇性がいっそう際立った。ショスタコーヴィチと子ども音楽の「怖さ」まで伝える厳肅さが、演奏者の尋常ではない気合いを映し出した。

そんな濃密な時間に臨む会場の空気が温かい。共に年月を歩み、追いかけてきたファンの思いが包み込んでいるようだった。この雰囲気はどこかで体験したな、と思ったら、2018年夏のザルツブルク音楽祭で最晩年のマウリツィオ・ボリーニを聴いた時を思い出した。同じ年輪を重ねた聴衆の心持ちは、やはり温かかった。今回、ホワイエに貼られた過去の公演ポスターには、多くの来場者が見入っていた。ホール側の愛情ある心遣いが嬉しかった。

2日目（12日）のコンセプトは新旧ウィーン楽派の対比だ。TOPPANホールで何度も集物的に取り組んだベートーヴェンから最後の弦楽四重奏曲第16番、そして後半にシューベルト《死と乙女》を持ってきた。このふたつの弦楽四重奏曲を組み合わせた録音がドイツ・グラモフォンに残



# ジェクト



ト フィナーレ Part1

## 万感の熱演 宮下 博

る。間に挟んだのはウェーベルンの《弦楽四重奏のための5つの楽章》と《6つのバガテル》。

同日のベートーヴェンは達観した余裕をたたえ、浮遊するような透明感と不思議な静けさを漂わせた。そこに割って入った無調のウェーベルンは、張りつめた超弱音が精緻を極めたニュアンスを発散し、気迫と切れ味で息が詰まるほど。この団体の先鋭さを改めて思い起こさせた。《死と乙女》はむしろナチュラルな表情に戻り、情緒に溺れない明快なドラマを築いた。この会場でしか出せない思い切ったピアノニッシモの効果も著しかった。

迎えた3日目(13日)は、盟友でもあるクラリネット・現代作曲家のイェルク・ヴィトマンを招き、前半は彼の手によるクラリネット五重奏曲の日本初演、後半は古典派の傑作、モーツァルトのクラリネット五重奏曲。前者には、このホールの微細な音まで聴き取れる音響特性から生まれた表情記号「Toppan Staccato(トッパン・スタッカート)」が登場し、ホワイエにスコアが展示された。Senza misura(拍子なし)と書かれた冒頭では、持続時間が秒単位で指定されていた。

特殊奏法のオンパレードによる前衛的な部分と、調性の甘美な感傷を何度も行き来する約40分は、現在と過去の間を往復するような時間感覚を提示。研ぎ澄まされた弱音の威力が最大限に発揮された。作曲者の自作自演が現代なら、モーツァルトは過去へのリスペクト。時にボルタメントを用いるクラシカルな味わいに転じ、5人のホモジェニティ(均一性)が極上のテクスチュアを織りなす。第2楽章では解脱した境地が浮かび、第3楽章のこぼれ落ちそうな微笑を経て、フィナーレを幸福感で満たした。

3日ともアンコールはなし。本編で語り尽くした、という潔い意思表示なのだろう。

同じ時期にドイツ・グラモフォンに多くの録音を残したエマーソン弦楽四重奏団は、一足早く2023年で活動に終止符を打った。名称は同じでもメンバーが変化した団体もある。そういう世代交代期にあたり、律儀に義理を果たしてくれたハーゲン・クアルテットには感謝しかない。余裕を持つての終結が、この団体の美学なのだろう。26年7月の残り2回は、45年に及ぶキャリアで本当のラスト・チャンス。名残惜しさが募る。(みやした・ひろし／音楽ジャーナリスト)

11/11(火) J.S.バッハ：フーガの技法 BWV1080より コントラプункトゥスⅠ～Ⅳ／ショスタコーヴィチ：弦楽四重奏曲第8番 ハ短調 Op.110／シュベルト：弦楽四重奏曲第15番 ト長調 D887
11/12(水) ベートーヴェン：弦楽四重奏曲第16番 へ長調 Op.135／ウェーベルン：弦楽四重奏のための5つの楽章 Op.5／ウェーベルン：6つのバガテル Op.9／シュベルト：弦楽四重奏曲第14番 ニ短調 D810《死と乙女》
11/13(木) ヴィトマン：クラリネット五重奏曲(2017)＊日本初演／モーツァルト：クラリネット五重奏曲 イ長調 K581

# Yo Kitamura

## “神童”から“真の音楽家”へ 現在地を刻む一夜

### 飯尾 洋一

チェリスト北村陽の演奏を最初に聴いたのは2017年のこと。当時、北村はまだ13歳の少年だった。筆者が番組作りにかかわっているテレビ朝日「題名のない音楽会」の「神童たちの音楽会2017」に出演し、チャイコフスキーの《ロココ風の主題による変奏曲》の一部を弾いてくれた。収録会場は東京オペラシティコンサートホール。お客さんも入ったなかで、少年はニコニコ顔で堂々たる演奏を聴かせてくれた。演奏中の朗らかな表情は、みんなをハッピーな気分にしてくれる。演奏を終えて感想を尋ねられると、こう答えてくれた。『オーケストラの海で泳いでいる気分』。なんとという秀逸なコメント。これは奏者でなければ思いつかない言葉だろう。

テレビは「神童」という言葉を好む。いや、正確に言えば視聴者が好む、というべきか。番組でも神童特集は人気企画とみなされており、定期的にこれぞという人に出演してもらおう。しかし、音楽系の活字メディアは「神童」という言葉に対してもっと慎重だと思う。少年時代のモーツァルトやサン＝サーンスみたいな歴史上の人物に対してなら躊躇なく使える言葉だが、今を生きる子供たちに使うとなれば氣を使うことが多い。まだ将来どうなるかわからないのだから、あまり気安く使うのはどうかな、と思ってしまう。そんなこともあり、「神童」とうたって紹介した才能が、そのまますくすくと成長してくれるかどうかはとても気になるのだ。

しかし、北村陽についてはほとんど氣を揉む必要がなかった。なにしろすでに9歳でオーケストラと初共演し、その翌年にはリサイタルを開いている。早い段階からオーケストラとの共演が多く、その後の活躍ぶりも継続的に目に入ってきた。やがて2023年の第29回ヨハネス・ブラームス国際コンクール第1位、2024年ジョルジュ・エネスク国際コンクール・チェロ部門優勝、同年のパブロ・カザルス国際賞第1位など、次々と快挙を成し遂げて、大きく羽ばたくことになった。

だから、2024年にTOPPANホールの〈ランチタイムコンサート〉に登場した際は、なによりもまず「立派な音楽家に育った」という感慨があった。しかもその日は無伴奏チェロ・リサイタルで、プログラムが強烈に尖っていた。リグーティ、三善晃、コダーイらが並び、ランチタイムに聴くとは思えないほど歯ごたえがある。鮮やかなテクニクに加えて、表現のスケールも大きく、燃焼度の高い演奏が記憶に残った。



その北村が3月20日にTOPPANホールに帰ってくる。今回はベルリンで日頃から北村とともに演奏しているという園田奈緒子のピアノと共演で、前回の無伴奏に続いて、またも意欲的なプログラムが組まれた。冒頭に一曲、前回の無伴奏の番外編のようにサーリアホの《ララバイ～無伴奏チェロのための》を置き、ショスタコーヴィチのチェロ・ソナタ、クレンゲルの《チェロとピアノのためのスケルツォ》、ナディア・ブーランジェの《3つの小品》、ブーランクのチェロ・ソナタと続く。一晚のリサイタルとしては、恐るべき濃密さと言うべきだろう。ただならぬ意気込みが伝わってくる。

サーリアホの《ララバイ》は曲名だけからはわからないが、オリヴァー・ナッセンを追悼して書かれた作品。悲しみのみならず、さまざまな感情が小曲のなかにつめこまれている。作風は異なるがショスタコーヴィチのチェロ・ソナタにも多様な要素がある。抒情性、アイロニー、ロマン、ユーモア…。「音楽ではなく荒唐無稽」とブラウダに批判される以前の情緒のジェットコースターぶりが聴きどころ。クレンゲルはチェロ・アンサンブルのための《讃歌》がよく知られるが、それ以外の作品を聴く機会は貴重。《スケルツォ》は技巧的だ。近年再評価が進むナディア・ブーランジェからは《3つの小品》を。締めくくりがブーランクのチェロ・ソナタというのも味がある。軽妙洒脱だが、至るところにメランコリーが潜む。光を当てる角度によって、いろいろな姿が浮かび上がるという点では、ショスタコーヴィチとも共通する。不思議な宝宝箱のようなプログラムに期待が募る。

(いいお・よういち／音楽ジャーナリスト)

### 北村 陽(チェロ)

2026年3月20日(金・祝) 18:00

園田奈緒子(ピアノ)

サーリアホ：ララバイ～無伴奏チェロのための (2018)  
ショスタコーヴィチ：チェロ・ソナタ ニ短調 Op.40  
クレンゲル：チェロとピアノのためのスケルツォ ニ短調 Op.6  
ナディア・ブーランジェ：3つの小品  
ブーランク：チェロ・ソナタ  
5,000円／U-25 2,500円 全席指定  
特別協賛：東急建設株式会社

### ◆今後の主催公演から



充実の年内公演に続き、年明けも室内楽の悦びにあふれるコンサートが次々に続きます。TOPPANホールが長らく、その歩みをじっくり見守っているフェルナーはTrio Rizzle、郷古廉と室内楽を。いまま古楽界の最前線をひた走るベルリン古楽アカデミーは2日間のプログラムを引っさげて7年ぶりに帰還。TOPPANホールで日本デビューを飾り、今や押しも押されもせぬ世界最高のチェリストの一人となったゴートイエ・カプソンは、盟友にしてホール初登場となるフランク・ブラレイと、ベートーヴェンのソナタ全曲を聴かせます。いずれも今回の号でご紹介予定でしたが、おかげさまで発売早々に完売となりました。チケットをお持ちのお客さまは、引き続きどうぞご期待ください。

2026年2月9日(月) 19:00

ティル・フェルナー(ピアノ) mit  
Trio Rizzle & 郷古 廉(ヴァイオリン) **完売**

毛利文香(ヴァイオリン)／田原綾子(ヴィオラ)／笹沼 樹(チェロ)  
シュベルト：ヴァイオリンとピアノのためのソナタ ト短調 D408  
マルティヌー：弦楽三重奏曲第1番  
ドヴォルジャーク：ピアノ五重奏曲 イ長調 Op.81  
特別協賛：株式会社きんでん

2026年3月4日(水)、3月5日(木) 各日 19:00

ベルリン古楽アカデミー **完売**

平崎真弓(ヴァイオリン、コンサートマスター)  
クセニア・レフラー(オーボエ)／ラファエル・アルバーマン(チェンバロ)

I—Pure Bach

J.S.バッハ：  
管弦楽組曲第2番 イ短調 BWV1067(ソロ・ヴァイオリン付き第1稿)  
ヴァイオリン協奏曲第1番 イ短調 BWV1041  
オーボエ協奏曲 ト短調 BWV1056R  
チェンバロと2本のリコーダーのための協奏曲 へ長調 BWV1057  
2つのヴァイオリンのための協奏曲 ニ短調 BWV1043 ほか

II—Bach & Beyond

J.S.バッハ：管弦楽組曲第3番 ニ長調 BWV1068(第1稿 弦楽版)  
アルビーノニ：オーボエ協奏曲 ニ短調 Op.9-2  
J.S.バッハ：チェンバロ協奏曲第5番 へ短調 BWV1056  
J.S.バッハ：オーボエとヴァイオリンのための協奏曲 ハ短調 BWV1060R ほか  
2公演特別協賛：株式会社 安藤・間  
助成：ゲーテ・インスティトゥート

2026年3月6日(金) 19:00

ゴートイエ・カプソン(チェロ)&フランク・ブラレイ(ピアノ)  
ベートーヴェン《チェロ・ソナタ》全曲 **完売**

ベートーヴェン：チェロ・ソナタ  
第1番 へ長調 Op.5-1／第4番 へ長調 Op.102-1／第2番 ト短調 Op.5-2  
第3番 イ長調 Op.69／第5番 ニ長調 Op.102-2  
特別協賛：清水建設株式会社



日時		公 演
1／7	(水) 19:00	TOPPANホール ニューイヤーコンサート 2026 1909年製ベーゼンドルファーとの邂逅 山根一仁 (ヴァイオリン) / 嘉田真木子 (ソプラノ) 川口成彦、兼重稔宏 (ピアノ) 特別協賛：鹿島建設株式会社
	(月) 19:00	ティル・フェルナー (ピアノ) mit Trio Rizzle & 郷古 廉 (ヴァイオリン) 毛利文香 (ヴァイオリン) / 田原綾子 (ヴィオラ) / 笹沼 樹 (チェロ) 特別協賛：株式会社きんでん
3／	4 (水) 19:00	ベルリン古楽アカデミー I—Pure Bach II—Bach & Beyond
	5 (木) 19:00	平崎真弓 (ヴァイオリン、コンサートマスター) クセニア・レフラー (オーボエ) / ラファエル・アルバーマン (チェンバロ) 特別協賛：株式会社 安藤・間
	6 (金) 19:00	ゴートイエ・カブソン (チェロ) & フランク・ブラレイ (ピアノ) ベートーヴェン《チェロ・ソナタ》全曲 特別協賛：清水建設株式会社
4／	20 (金・初) 18:00	北村 陽 (チェロ) 蘭田奈緒子 (ピアノ) 特別協賛：東急建設株式会社
	4 (土) 18:00	アンナ・プロハスカ (ソプラノ) with ジョヴァンニ・アントニーニ (指揮・リコーダー) イル・ジャルディーノ・アルモニコ
5／	12 (火) 19:00	レオンコロ弦楽四重奏団

日時		公 演	
5／	26 (火) 19:00	ニコラ・アルトシュテット(チェロ) プロジェクト 第1夜 ― Duo ヨナス・アホネン(ピアノ)	
	29 (金) 18:30	第2夜 ― マラソンコンサート イリア・グリーンゴルツ、毛利文香(ヴァイオリン)／原 麻理子(ヴィオラ)／ヨナス・アホネン(ピアノ)	
6／	10 (水) 19:00	トリオ・ヴァンダラー	
〈ランチタイムコンサート〉			
TOPPANホールが選んだ若手ホープによるミニ・コンサート [全席指定]			
2／	13 (金) 12:15	Vol.138	特別企画 〈1909年製ベーゼンドルファーの息吹 II〉 佐藤麻理(ピアノ)&瀧村依里(ヴァイオリン)& 田原綾子(ヴィオラ)&築地杏里(チェロ)
	5／		2 (土) 12:15

※開場は開演の30分前となります。  
※未就学児のご入場はご遠慮ください。なお、全主催公演で託児サービス[要予約・有料]をご利用いただけます。  
ご利用の詳細については、各公演チラシをご確認ください。

2025年12月中旬現在

最新情報はオフィシャルWEBサイトでご案内しています ※WEBチケットもご利用いただけます

www.toppanhall.com

## INFORMATION

### 第17回 TOPPANチャリティーコンサート 親密な対話が織りなす上質な音楽のひととき



**荒井里桜 (ヴァイオリン) & 田所光之マルセル (ピアノ)**  
2026年3月13日 (金) 19:00  
ドビュッシー：ヴァイオリン・ソナタ  
ブーランク：ヴァイオリン・ソナタ  
チャイコフスキー：《18の小品》より〈遠い昔〉Op.72-17 [ピアノ・ソロ]  
チャイコフスキー：ワルツ・スケルツォ ハ長調 Op.34  
フランク：ヴァイオリン・ソナタ イ長調  
全席指定：5,000円 ※印刷博物館入場可 (当日のみ)  
主催：TOPPANホールディングス株式会社  
寄附先：公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)  
チケットのお申し込み・お問い合わせ：TOPPANホールチケットセンター

アーティストたちの熱演が刻まれてきたTOPPANチャリティーコンサート。17回目となる今回は、荒井里桜 (ヴァイオリン) が田所光之マルセル (ピアノ) とともにフランスの三大ヴァイオリン・ソナタに挑みます。荒井は東京芸大を卒業後、留学先のスイスでジャンヌ・ヤンセンに師事。第87回日本音楽コンクール第1位など、当時すでにその実力は多くの人が知るところでしたが、その後も海外での研鑽や様々な音楽家たちとの共演を重ねるなかで、瑞々しい感性は磨かれ続け、いま最も注目を集めるアーティストの一人となりました。現在はベルギーのエリザベート王妃音楽院でオーギュスタン・デュメイに師事する傍ら、日本国内での演奏活動にも意欲的に取り組んでいて、その活動内容も多彩。とどまることなく進化を続けています。一方の田所も、ソロはもちろんのことヴァイオリニストとの共演も多数。共演者とともに音楽を創りあげる表現の豊かさ、繊細さは高く評価されています。今回、プログラムの中心に据えられたドビュッシー、ブーランク、フランクのヴァイオリン・ソナタは、荒井の魅力を際立たせると同時に、日本とフランスの感性をあわせ持つ田所のピアノが加わることで、思いもよらぬ新たな輝きを放つに違いありません。今回が初共演の二人だからこそ新鮮な驚きや未知なる化学反応に、どうぞご期待ください。

TOPPAN  
CHARITY  
CONCERT

本公演の収益は、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) に寄附され、カンボジア女性の識字学習支援事業「SMILE ASIA プロジェクト」の推進に役立てられています。

### 4人の若き名手が紡ぐ、ウィーンの香り漂う優美なアンサンブル

2026年最初の〈ランチタイムコンサート〉は、シリーズ〈1909年製ベーゼンドルファーの息吹〉第2弾です。長らくウィーン国立歌劇場で使われ、輝かしい時代のウィーンの空気をたっぷりと吸って育ってきた、ベーゼンドルファー Model250。その特別な出自は音にも明確に刻まれ、どこまでも柔らかくあたたかく、音楽に寄り添う懐の深さと、弾き手によってまるで違う顔をのぞかせる一面を持ち合わせています。今回この特別な楽器と向き合うのは、ウィーンを拠点に活動を展開している佐藤麻理。彼女を中心に、佐藤と同時期にウィーンで学んだ瀧村依里、日本の室内楽シーンに欠くことのできない田原綾子、心境著しいチェロを聴かせる築地杏里が集結。4人はこのステージが初共演となります。プログラムは、佐藤がヨーロッパの音楽シーンで主軸として活動してきたピアノ四重奏曲から2曲をセレクト。マラーはウィーンで学生だった頃の若き日の作品、シューマンは言わずと知れた名作——いずれも歌心とアンサンブルの魅力が鍵を握るだけに、彼女たちが名器“ベーゼンドルファー Model250”のもと、どのようにアンサンブルを、そして音楽を紡ぎだすのか。どうぞ楽しみにお待ちください。



〈ランチタイムコンサート Vol.138〉特別企画  
1909年製ベーゼンドルファーの息吹 II  
佐藤麻理 (ピアノ) & 瀧村依里 (ヴァイオリン) &  
田原綾子 (ヴィオラ) & 築地杏里 (チェロ)  
弦と交わる、弦を彩る  
2026年2月13日 (金) 12:15  
マラー：ピアノ四重奏曲断章 イ短調  
シューマン：ピアノ四重奏曲 変ホ長調 Op.47  
2,000円 全席指定  
【TOPPANホールクラブ】  
ゴールド会員：1枚無料 / レギュラー会員：1枚目のみ1,500円

#### 表紙：ゴートイエ・カブソン

今や世界を舞台に華やかに多彩に活動する、人気・実力ともに当代最高のチェロの貴公子、ゴートイエ。2022年4月、不穏な世界情勢の真ただ中に来日し、豊穣な響きとあたたかな音楽で聴衆を魅了した公演より、その強い眼差しが印象的な一枚を。冒頭、平和を願ってサプライズ演奏された《鳥の歌》は、強く胸をうち客席の涙を誘いました。3月のベートーヴェンに期待。

### ブラームス室内楽と 人間国宝の至芸



2/15は、反田恭平率いるジャパン・ナショナル・オーケストラ (以下、JNO)。期待の若き才能がひしめきあうJNOは、国内外で精力的に演奏活動を展開、各地で絶賛を博しています。彼らの新たな挑戦のひとつが、オーケストラの原点ともいえる室内楽にフォーカスした《JNO室内楽シリーズ》です。今回は、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロで紡ぐ、ブラームスのソナタをお贈りします。先ごろの〈ランチタイムコンサート〉での熱演がまだ記憶に新しい水野優也 (チェロ) に、秋元孝介 (ピアノ) など、TOPPANホール主催公演でおなじみの顔ぶれも登場。彼らがブラームスと向き合い、その奥深い世界をどう響かせるのか。客席でじっくりとご体感ください。

続く2/21は、重要無形文化財保持者認定を受けたことが大きなニュースとなったばかりの善養寺恵介 (尺八)。TOPPANホールでは、開館当初から定期的に自主公演を重ねてきました。作品、演奏はもちろんのこと、語る言葉の端々にも常に表現者としての柔軟で新鮮な感性があふれている善養寺。集中力高く挑む独奏、共演者とともに紡ぐ音楽は、それぞれに精緻な響きを生み出し、ホールの音響を知り尽くした彼ならではの唯一無二の空間を、毎回創りあげています。山登松和 (箏)、藤本昭子 (地歌三絃) ら名手に加え、善養寺彩代 (ピアノ) とのデュオなど、今回は尺八の魅力と可能性を強く感じさせてくれる公演になりそうです。どうぞお聴き逃しなく！



反田恭平プロデュース JNO室内楽シリーズ Vol.5  
ブラームス×JNO Chamber Colors  
—ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロで紡ぐブラームスのソナタ—  
2026年2月15日 (日) 14:00  
大江 馨 (ヴァイオリン) / 有田朋央 (ヴィオラ)  
水野優也 (チェロ) / 秋元孝介 (ピアノ)  
ブラームス：ヴァイオリン・ソナタ第1番 長調 Op.78 《雨の歌》  
ブラームス：ヴィオラ・ソナタ第1番 へ短調 Op.120-1  
ブラームス：チェロ・ソナタ第1番 短調 Op.38  
全席指定：6,000円  
主催・お問い合わせ：Japan National Orchestra  
[info@jno.co.jp]

善養寺恵介 尺八演奏会  
2026年2月21日 (土) 16:00  
山登松和 (箏) / 藤本昭子 (地歌三絃) / 善養寺彩代 (ピアノ)  
尺八古典本曲：雲井獅子 / 三谷清攪 / 鈴慕  
善養寺彩代：無言歌  
地歌：根曳の松  
全席指定：5,000円 / 学生2,000円  
主催・お問い合わせ：善養寺恵介 04-2924-0636

チケットのお申し込み：TOPPANホールチケットセンター

#### 編集後記

開館25周年のアニヴァーサリーシーズンが始まって、3か月。TOPPANホールらしく独創的な企画の数々でお迎えしていますが、お楽しみいただけていますでしょうか？ どの公演も皆さまに深い余韻を残せていましたら幸いです。今号では、早くも今シーズンのハイライト

の様相を呈した大型プロジェクト、〈TOPPANホール25周年 室内楽フェスティバル〉〈ハーゲン プロジェクト フィナーレ Part1〉を徹底レポート。アーティストの表情豊かな写真とともに、当夜の衝撃と興奮がよみがえる文章を、ぜひ年末年始のひとときのお供に。 (雪)